
 学 会 記 事

第43回新潟造血管腫瘍研究会

日 時 平成13年4月6日(金)

18:00~

会 場 新潟大学医学部

有壬記念館 2階

I. 一 般 演 題

1) 当科における急性骨髄性白血病の治療成績

永井 孝一・鈴木 訓充	(県立中央病院)
阿部 惇・村川 英三	(内科)
関谷 政雄・酒井 剛	(同)
	(病理検査科)

【目的】成人急性骨髄性白血病の自験例を解析し、今後の治療戦略を考える。

【対象及び方法】新潟県立中央病院内科にて、1998年1月より2000年12月までに入院加療を施行した成人急性骨髄性白血病81例を対象とした。年齢は、17才~88才(中央値61才)で、男性49例、女性32例であった。FAB分類別では、M0; 4例, M1; 18例, M2; 27例, M3; 10例, M4; 13例, M5; 3例, M6; 6例であった。全身状態が不良のために化学療法の未施行例や、治療開始後の早期死亡にて治療評価の不能例を除く69例に単剤から多剤併用化学療法を施行し、治療成績を解析した。生存率の解析には、 Kaplan-Meier法を使用した。

【結果】全81例のKaplan-Meier法による5年生存率は、14%で、50%生存期間は早期死亡例が多いことより、約10ヶ月であった。69例中46例(66.7%)が完全寛解し、予後は非寛解例に比し良好であった。年齢別では、60才未満の34例中25例(73.5%)、60才以上の35例中21例(60%)に寛解を得、60才未満の症例の予後は60才以上に比し良好であった。FAB分類別では、M2(75.8%)、M3(77.8%)、M6(100%)の寛解率が良好であったが、予後としてはM2が最も良好で、M0及びM5は、寛解率、予後ともに不良であった。治療法別では、BHAC-DMP療法26例中21例(80.8%)、DCMP療法6例中5例(83.3%)、IDA+AraC療法15例

中13例(86.6%)と多剤併用療法の寛解率が良好で、BHAC-DMP療法とDCMP療法の予後が良好であった。M3に対するATRA療法の寛解率は50%で、AraC少量療法では16例中5例(31.3%)の寛解のみであった。

【考察】多剤併用療法による完全寛解例の予後が良好で、全身状態が許せば多剤併用療法による完全寛解を目指す治療が必要と考えられた。今後の課題として、高齢者及び予後不良病型の克服が必要で、近年多用しているIDA+AraC療法は、高齢者にも比較的安全に寛解が得られ、有用な治療法と考えられた。

2) 慢性骨髄性白血病の治療におけるインターフェロン α の効果—STI571の導入を目前にして、インターフェロン α の意義について考える

藤原 正博・曾我 謙臣	(長岡赤十字病院)
小池 正・黒川 和泉	(内科(血液科))

インターフェロン α (IFN α)はCMLの治療薬として重要な地位を占めていることは確かだが、長期投与に伴う種々の副作用が知られており、また自己注射は患者にとってはかなりの負担となる。今回当院での治療成績をまとめることで、CMLにおけるIFN α の意義について考えてみた。

【対象】平成4年7月から12年7月までの間に当院でCML慢性期と診断され、IFN α 単独で治療を開始した13症例のうち、骨髄移植を受けた1例と2か月ほどで他院へ転院した1例を除いた11例を対象とした。2例は副作用や効果不十分のため、2週間および2か月で中止。3例は無効のため途中からHydroxyurea(HU)を併用した。残り6例はIFN α 単独治療を継続した。

【結果】①IFN α にHUを併用した例では、血液学的寛解にはなったものの細胞遺伝学的効果は得られなかった。②IFN α の効果が不十分な例は、治療開始時の血小板数が多い傾向がみられた。③IFN α 有効例はほぼ2か月以内に血液学的寛解状態となり、6例中5例で細胞遺伝学的CCRが得られた。CCRに到達するまでの期間は6~48か月とかなりばらつきがあった。

【考察】IFN α は細胞遺伝学的効果が得られてこそ有用な薬剤なので、治療にあたってはまずIFN α 単独で開始し、血液学的効果が得られるようならそのまま継続して細胞遺伝学的CCRをめざすのがよいと思われる。血液学的効果が得られない場合には、患者のQOLを